

生後1ヵ月児の泣き声に対する母親の反応

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34917

11. 生後1ヵ月児の泣き声に対する母親の反応

金沢大学医学部保健学科 ○田淵 紀子 島田 啓子
小松みどり 坂井 明美

I はじめに

乳児の泣き声は産声にはじまり、その後数ヵ月間、乳児の内的情報を伝達する最も顕著な行動といえる¹⁾。

出生直後の新生児は、泣くことによって自分のニーズ(空腹、痛み、不快等)を母親に伝えるが、母親が児の泣き声に適切に対応できないと、その後、育児不安が増大し、適切な育児行動の喚起を妨げ、やがて育児ノイローゼに陥る可能性がある。したがって、母親が児の泣き声に適切に対応できるよう母親をサポートしていくことが重要である。

乳児の泣きに関するこれまでの研究には、泣き声のタイプの音声学的分析²⁾や、ダウン症などの医学的な問題のある児の泣き声の特徴³⁾などが提示されている。しかし、児の泣き声を聞いたときの母親の感情や対処行動については分析されていない。また、児の泣きに対して母親がどのように適応していくようになるのか、という点については明らかにされていない。

そこで、児の泣き声に対する母親の感情や、母親がどのようにして児の泣きの意味をみきわめていくようになるのかを明らかにし、援助に役立たいと考えた。前報⁴⁾で、出生後1週以内の新生児の泣き声に対して、母親がどのように受けとめ、反応しているのかを質的に探り、5つの要素を明らかにした。今回は、同対象の生後1ヵ月時点での児の泣き声に対する母親の反応を明らか

にすることを目的とした。

II 方法

調査対象：金沢市内のクリニックにて、出生した正常な新生児をもつ母親11名

調査方法：生後1ヵ月頃に、母子の自宅を訪問し、児の泣き声についての受けとめや感情、対処行動について半構成的に面接を行った。面接内容は、承諾を得て録音し、逐語録をおこした。

分析方法：逐語録をもとに質的研究経験者複数で内容分析を行った。

III 結果

1. 対象の概要

母親の平均年齢は27歳(24~33歳)。初産婦6名、1経産婦5名。出産様式は帝王切開1名を除いて、他は経膈分娩であった。子どもの在胎週数は、36週以上、41週未満であり、出生時体重は2825~3390gの成熟児であった。一人当りの面接所要時間は、30~70分間を要した。

2. 児の泣き声に対する母親の反応

児の泣き声に対する母親の反応には、①感情・情動・認知的な反応、②泣きの解釈、③対処行動、④泣きに対する潜在的意識、⑤児の性格・気質の感じとりの5つの要素(図1の黒地に白字

部分)が挙げられた。

つまり、実際にわが子の泣き声を耳にした母親は“いとおい”，“かわいい”，“うれしい”などの児への愛着を示すような positive な感情や“また、泣いた”，“泣いてばかり”などの negative な感情，母を“呼んでいる”という合図としての認知的な反応等の感情・情動・認知的な反応がみられた。そして“どうして泣いているのかしら。おっぱいかしら，おむつかしら。”といった泣きの解釈がされ，授乳やおむつをみるなどの泣きに対する対処行動がとられていた。その結果，児が泣きやむか，泣き続けるかという児の反応から，母親は自分の対処が妥当であったかどうかを判断し，児が泣き続ける場合に，再び泣きの解釈をし直し，次なる対処行動がとられていた。つまり，児の泣き声を耳にしてから児が泣きやむまでの過程で，泣きの解釈と対処行動が繰り返されていた。このようなプロセスを通して，母親は赤ん坊の泣きに対して抱いている潜在的な意識（赤ん坊とは，お腹がすいたときに泣くものである。や，何らかの理由があるから泣いて訴えている。や，赤ん坊とは，とにかく泣くもの。といった赤ん坊一般に対して抱いているイメージ）をもとに，“この子（我が子）はあまり泣かないおとなしい子”や“泣いてばかりで気難しい子”というように児（我が子）の性格・気質を感じとって

いた。

以上のように，児の泣き声を聞いたときの母親の反応として5つの要素があげられた。次にこれらの反応をもたらす状況（要因）について分析した。

3. 児の泣きに対する母親の反応に関連する状況（要因）（図1の四角で囲った部分参照）

1) 感情・情動反応をもたらす状況（要因）

まず，児の泣き声を聞いたときの母親の感情・情動反応に関連する状況として，母親が上の子の世話をしていたり，家事などをしていてとても忙しい状況下にある時に児の泣き声を聞くと，“あーまた泣いてしまって”という感情反応になるのに対し，気持ちの余裕があれば“かわいいな”というような感情反応につながっていた【母親の心理的状况】。また，“あーまた泣いた。でもかわいいそうだから，だっこしようかな。”というように，母親として好ましい態度をとろうというような母親役割意識が働いている場合もあった【母親役割意識】。さらに，前回の授乳時間からの時間経過が長ければ“あーやっと泣いてくれた”というように泣きを待ち焦がれるような positive な反応になるのに対し，前回の授乳時間からの時間経過が短かいと“もう，泣いてばかり”というように negative な反応につながっているようであっ

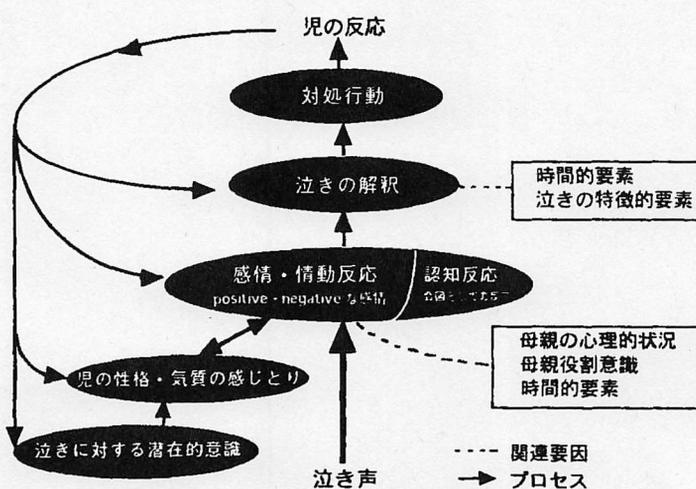


図1. 生後1ヵ月児の泣き声を聞いた時の母親の反応と関連要因

た【時間的要素】。

また、児がよく泣く子であると母親が認識している場合には、“また泣いた”や“泣いてばかり”というようにnegativeな反応になっており、逆に母親が児はあまり泣かない子と認識している場合には“やっと泣いてくれた”や“泣いてくれた方が元気で安心する”というような児の泣きをpositiveにとらえる反応につながっていた。

2) 児の泣きの解釈につながる状況(要因)

児の泣きの解釈につながる要因には、まず、前回の授乳時間から予測した授乳時間であるかどうかという【時間的要素】があげられる(図1)。つまり、母親は“さっきおっぱいをあげた時間は〇時だったから、まだ2時間しか経ってないからおっぱいじゃないわ”や“そろそろおっぱいの時間だから、おなか为空いたのね”などのように、前回の授乳時間から次の授乳時間がいつ頃になるかを予測し、その時刻近くに児が泣けば、おっぱいを欲しがっていると解釈し、予測した時刻でないときに児が泣けばおっぱいを欲しがっているのではないと判断していた。

児の泣きの解釈につながるもう一つの要因として、児の泣きの声質やしぐさなどの様相という

【泣きの特徴的要素】(表1参照)があげられる。つまり、母親は“おっぱいの時は頑固に泣くけどおむつの時は頑固ではない”や“おっぱいのときは怒っているように泣く”というように児の声質をとらえていたり、また、おっぱいの時は“口をバクバク動かす”、“手を口にもっていく”、“衣服を吸う”や、おむつの時は“気持ち悪そう”というように児のしぐさから泣きを解釈しようとしていた。

IV 考察

以上の結果から、生後1ヵ月頃までの新生児の泣き声に対する母親の反応をまとめると図1に示すようなプロセス(矢印方向)をたどっていることがわかった。

上述してきたように、母親は実際にわが子の泣き声を耳にしたとき、“いとおいしい”、“かわいい”、“また泣いた”などの感情や情動反応がおこるが、児が泣いた時の母親の心理的な状況や、母親としての役割意識、前回の授乳時間からの経過、児の気質の感じ取りなどにより、positiveな反応や、時にはnegativeな反応を生じていることが明らかになった。

表1. 母親が受けとめた児の泣きの意味と児の泣きの特徴的要素

児の泣きの意味	母親が受けとめた児の泣きの特徴的要素	
	<児の声質>	<児の様相>
おっぱいが欲しい	<ul style="list-style-type: none"> ・頑固 ・怒っているよう ・自己主張があるよう ・泣きちぎるよう ・フガフガフガフガと弱い ・グズグズグズグズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・口を動かす ・手を口にもっていく ・衣服を吸う ・顔を無理に押し付けてくる(すりよってくるよう) ・目がつり上がるみたい
おむつを替えてほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・頑固ではない ・お腹が空いた時より小さい ・グズグズグズグズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・きぼっているような顔つき ・気持ち悪そう
眠い	<ul style="list-style-type: none"> ・だんだん頑固になる ・すごく怒る 	<ul style="list-style-type: none"> ・顔をしかめる
甘えたい	<ul style="list-style-type: none"> ・やさしい ・甘えた ・訴えているよう ・うかがい泣き 	<ul style="list-style-type: none"> ・こちらの様子をみて泣いている ・目を見て甘える ・他の人が話しかけると泣きやむが、母が行くとまた泣く

そして同時に、“どうしたんだろう”と泣きの意味を探ろうとし、まず、前回の授乳時間から、今の泣きはおっぱいを欲しがっている泣きかどうか判断されていた。今回の調査対象の母親はすべて母乳哺育をしており、児の泣き声を耳にするためおっぱいかどうかを判断しようとしていた。新生児期は、授乳以外はほとんど眠っており⁵⁾、生後1か月児の特徴として、3～4時間毎の授乳が生活のサイクルの中心になっていることがあげられる。こうした背景が、1か月児を持つ母親にとって前回の授乳時からどれくらい経過しているのかがその時の泣きを解釈する大きな要素になっていると推察される。つまり、おっぱいを欲しがっている泣きかどうかを時間で判断している点が1か月児を持つ母親の特徴といえるのではないだろうか。さらにこの判断には、おっぱいの時には口がバクバク動いていたり、手や服を吸うような児のしぐさや、頑固に泣いたりといった声質などの泣きの特徴をつかんで判断材料にしていることがわかった。全例ではないが、母親の中には、児が周囲の様子をうかがいながら泣いたり、甘えや怒りの感情を込めて泣いていると受けとめていた。このように、1ヵ月といえども、我が子の要求の違いを泣きの特徴から読み取ることができたり、探ろうとしている段階にあると思われた。これらより、生後1ヵ月という時期は児の要求の見極めを確かなものにする移行の過程にあると推察される。

そして、児の泣きの意味を探り当て、具体的な対処行動を試みるが、母の行った対処行動の結果、児の反応として泣き続ける場合に、泣きの再解釈がされ、次の対処行動がとられていく。このように母の対処行動と児の反応のプロセスの中で、母は対処が妥当であったかどうかを判断していた。生後1週頃の分析では、児の泣きに対して母親が対処してきた行動や児の反応から、児の性格・気質を感じ取りはじめているという点を明らかにした。今回の分析では、生後1ヵ月時点においては、母親の児の泣きに対する反応のしかたと児の性格・気質の感じとり方は、双方向的に循環し

ながら相互に影響していると思われた。

V 結論

今回、生後1ヵ月児の泣き声に対する母親の反応について質的な分析をした結果、以下の点が明らかになった。

1. 児の泣き声に対する母親の反応として、〈感情・情動・認知反応〉、〈泣きの解釈〉、〈対処行動〉、〈泣きに対する潜在的意識〉、〈児の性格・気質の感じとり〉の5つの要素が上げられた。

2. 児の泣きに対する母親の反応をもたらす状況(要因)として、

1) 〈感情・情動反応〉には、母親の心理的状況、母親役割意識、時間的要素、児の性格・気質の感じとりがあげられた。

2) 〈泣きの解釈〉には、時間的要素と泣きの特徴的要素があげられた。

以上より、新生児をもつ母親の心理的理解を深め、退院時指導として1ヵ月までの育児行動の適応を促すことにつなげていきたいと思う。さらに、negativeな反応を引き起こす状況や母親側、児側の要因について検討していきたいと思っている。

引用文献

- 1) 竹中和子：乳児の泣きと乳児-保育者相互作用，日本赤十字看護大学紀要，1992。
- 2) Wasz-Hockert, et al. : The infant cry: a spectrographic and auditory analysis. 1968.
- 3) 大井 照，馬場一雄：泣き声と表情，改訂小児生理学，へるす出版，1994。
- 4) 田淵紀子他：新生児の泣き声に対する母親の受けとめ方，日本助産学会誌，10(2)，pp. 81-84, 1997。
- 5) 馬場一雄編：改訂小児生理学，へるす出版，1994，2-3。